

## 本号の内容

- |                |                   |
|----------------|-------------------|
| 1 新年にあたって      | 辻田代表理事            |
| 2 通巻100号記念特集   | CSNニュース100号記念に寄せて |
| 3 マイホビー紹介      | 鈴木 進              |
| 4 吉川NPOフォーラム案内 |                   |
| 5 CSN10月の動き    |                   |

通巻  
100号  
記念号

## 新 年 に あ た っ て

### さ ら に、 事 業 型 N P O を め ざ し て

代 表 理 事 辻 田 満

当NPO法人の設立は2004年11月です。早いもので、9回目の新年をこうして迎えております。設立時は会員数25名でのスタートでした。現会員28名の内、約半数の15名の方々が創設以来の継続会員です。本当に長きにわたってご支援を頂き感謝の念に堪えません。

設立当初に比べると、事業型NPOも社会に認知され始めて仲間も増えつつありますが、まだまだ設立時のミッションを具現化するには程遠い状況です。

そこで、CSNにとって丁度節目の創立10周年となる新たな年を迎えるにあたり、CSNの活動を、さらに事業型に舵を切って活動を開始しようと思っています。

正会員とは別に、シニア・アドバイザーの呼称で活動メンバーを募ってまいりました。活動の幅をさらに広げるために、メンバーをシニアに限定することなく募るため、新年度より呼称をシビルセンターとして変更して、さらに活動メンバーを増やしたいと思っています。

また、従来は2か月に1度のペースで会員が集まる行事として、CSNサロン(6月、12月)、オープンセミナー(8月)、推進委員会(10月)、シニアアドバイザーミーティング(2月)等を開催してきましたが、これらはいったんリセットし、

年3回のペースでCSNサロン(7月、10月、1月)の行事とします。また、各行事共も開催月の第2月曜の15時～17時と統一することとしました。

つぎに、創立以来毎月欠かさず発行してきた活動報告(2013年1月号で100号)も、新年度から一新し、年4回の季刊発行(4月、7月、10月、1月)とします。

そして、これからはより一層事業型NPOとしての取り組みを強化して参りたいと願っております。



土木学会を母体にした中間支援組織としてのNPO法人の設立準備も着々と進められています。「新しい公共」なるコンセプトで我々NPOの活動がますます社会に求められてきています。ここで心機一転、創立時の熱い思いに立ち返ってさらなる活発な活動を展開して参りますので、今年も何卒皆様方のお力添えをお願い申しあげます。そして、今年も1年皆様方にとりまして、健康で明るい1年でありますことを心からご祈念申しあげ新年のご挨拶とさせていただきます。

通巻 100 号記念特集

## シビルサポートネットワークニュース通巻 100 号記念に寄せて

### ■ いまこそ、8年間培ってきた知識と行動力を 理事 舌間 久芳

#### 謹賀新年

100回記念誌の発刊、慶祝の至りです。当 NPO 法人は創立 8 年を迎えました。創刊号より CSN 便りを通読いたしますと、皆さんの努力と絆が 99 回に亘り、汗と共に紙面に語り継がれています。動乱の年明けとなりました。時はまさに我が CSN を求めています。高度成長期に整備が始まった我が国の社会基盤はことごとく老朽化、劣化し、明日を待てない状況です。地震や風水害、深層崩壊などが加わり、脆弱な国土に拍車をかけていると言っても過言ではありません。

今、我々は何を為すべきか。

求められているのは、この 8 年間培ってきた深い知識と行動力です。それは、社会・市民・行政・技術者を結ぶ絆でもあります。深化した四本柱を中心に、組織を挙げて、力強く我々のメッセージを発信していくうではありませんか。

平成 25 年新年



### ■ 100 号記念—CSN の今後について— 理事 出崎 太郎

ボランティアでなく事業収益型 NPO を目指すという文言に惹かれて CS ネットに参加してから早 8 年になります。

当時、大学卒業以来 30 年弱勤め続けていた建設コンサルタント会社を辞め、次へのステップを考えていた時なので、生活のための収益が絶対条件だったのです。

CS ネットの活動は、規約作り、NPO 認可取得、設立記念講演会から始まって、収益事業を模索していた時期を経、現在では BCP (事業継続計画)、バイオマス(化石資源を除いた生物有機性資源)活用を柱に、橋の長寿命化支援への取組みがそれに続こうとしています。

この間、毎月発行されるこの CSN 活動報告が大きな役割を果たし、編集関係者の労力は大変なものだったと思い感謝しています。

しかし、現状で問題がないわけではありません。各事業ともリーダーの下に複数の人材を育成しつつも、その収益で当 NPO の活動運営費を貢献するまでにはなっていないからです。

NPO 運営費を捻出するためには、実働者への報酬、経費の他に運営費に回すだけの収益が必要になります。私たち CS ネットは、建設部門支援

の人才活用型 NPO ですから、製造・販売部門を持ちません。

それ相当の収益を得るために相当の成果(品)を作成する知識と労力を必要とします。

現在の構成員からみて、知識はともかく労力を期待するには無理があるように思います。

それを補うにはどうしたらよいか。労働部門をどこに求めるかということになります。

理想的なのは若い人の就職の受け皿になることですが、十分な仕事量の確保が必要になります。

当 NPO で紹介されたアメリカの NPO の事例や、日本の NPO (環境エネルギー政策研究所)に所属してフォーラムの講師を務める 32 歳山下紀明氏の例もありますが、これは例外でしょう。

若い技術者はどこにいるか?

大学院生、大学留年生。設計事務所の若い技術者。大学や設計事務所と連携できないか。受注に苦労し、新規分野開拓を志向している設計事務所はないか。現場の地元に協業できる設計事務所は



# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号

CSN

ないか。熟練技術者とのコラボレーションで技術を吸収できますよ。

どんな技術者でも現役で使用していないとサビてきます。現場を離れると最新の技術動向に疎くなります。

私は、再就職をして現場に戻りました。生活資金がまだ必要だからです。が、必ずしも自分のやりたいことがやれているとは言えません。幸いまだ仕事をすることに飽きてはいませんので、NPOでのびのびと活動することに望みを抱いています。事業型NPOへの期待大です。

最後に。自分が理事であることを忘れていました。自分の理想がかなえられるように力を尽くしたいと思います。夢が広がり、集まることが楽しいNPOにしたいです。特にオープンセミナーの企画は各界で活躍している人のお話を直接聞けるので、とても面白いと思います。皆で楽しみましょう。

会員のみなさま、これからもご協力よろしくお願ひいたします。

## ■ 祝 シビルサポートネットワークニュース100号発行

理事 鈴木 進

新年あけましておめでとうございます。  
シビルサポートネットワークニュース100号  
発行おめでとうございます。

平成16年11月にCSNの認可がされてから、足掛け9年経ちました。俗に「石の上にも3年」と言いますがなんとその3倍の活動を継続したことになります。

この間、途切れることなくニュースの編集・発行を中心となって担われた高橋事務局長と関係者の方々のご努力に対し本当に頭が下がる思いです。

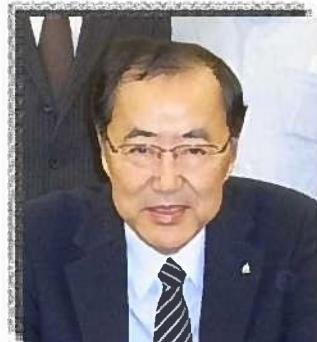
認可申請にあたって当時、辻田代表が熱心に発起人の依頼に奔走されて私の会社にも来られたことは、昨日のことのように思い出されます。

NPOの存在が未だ、社会的に認知されておらず数も少ない時代に代表を筆頭に設立の判断をされた宇佐副代表・高橋事務局長と関係者の方々の熱意に驚嘆いたします。

これまで事業型NPOとして経営的に決して順調な9年ではなかったと思いますが、「社会的なニーズ」と「シニアエンジニアの社会的貢献」という使命を忠実に実行した事業として、BCP事業・バイオマスタウン構想事業・自治体とのパートナーシップ事業等々と時代を先取りした活動には敬意を表します。

先般、私はCSNの理事を拝命いたしました。今回100号の記念号に投稿の機会を与えられて事を光栄に思い感謝をいたします。

これまで一會員としてもこれという貢献が出来ずにいましたが、これを機にCSN発展のために会員の皆様の協力を得て一層の努力をしたいと思います。



発展のためには、

- ① 組織の充実（会員の増強）、
- ② 各種事業への会員の積極的な参加、
- および、③定例会議等の集まりへの会員参加数の増大などが挙げられると思います。

これらについては、役員の努力にもかかわらず現在なかなか期待通りの成果が上がっていないと思います。

事業型NPOですから、積極的に事業参加する意欲のある方々がお集まりいただくことを目標とすることが重要だと思いますが、まずは応援団となって頂くシニアアドバイザー会員の増強から始めて、それの方々の専門性を生かす形で新たな事業を立ち上げることが出来れば、正会員の増強になるのではないかでしょうか。

ともかく、会員が積極的に参加していただくためにはCSNが魅力あるNPOとなることが第一ですので、皆様のお知恵を拝借しながら、活動内容を大いに宣伝して、新しい年に前進の成果が出るように頑張りましょう。

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



## ■ 福島で考えたこと～がれきと除染～

会員 星野 雅彦

星野さんから原稿をメールでいただきました。

辻田代表宛てのその前文に、みなさまにもぜひご紹介したいことが書かれていました。

辻田 代表 様

齢50を過ぎると月日のたつのが早いと言いますが、私のこの1年は実に密度の高いものでした。

転職による新たな環境での仕事に加えて長女の結婚、実父の逝去とプライベートでも大きな出来事があり、この年になっても心の震える事が多々あることに驚くとともに、改めて幸せとは何かを考えさせられました。

特に、環境省の仕事に深くかかわることになり、福島県での仕事は自らの人生観にすら影響するものでした。

一例をあげれば、個人事業主としてお店を営んでいた人は、津波で半壊した店舗を抱えてどん底にいました。彼はこれまでそこそこの成功者であったのに、津波で高級車を流され、顧客を失い、節税対策のため利益が上がってないようにしていたことで満足な補助が受けられず、経営者であるため失業保険も無く、傍で見ても痛ましい程でした。

今回寄稿をするにあたって、できるだけ生の声をとも思いましたが、7年始の記念号にそぐわないで技術的側面を中心に書いてみました。そのため読み物としては堅苦しくなりすぎました、文才の無さ故とご容赦ください。

それと、査読を受けておりませんので誤植や不適切な表現等があれば加筆修正頂けますようお願い申し上げます。

なかなかお会いできず申し訳ありません、良いお年をお迎え下さい。

社会情勢が見えない中、来年も厳しい年になるような気が致しますが宜しくお願い申し上げます。

星野 雅彦

CNSの機関紙「活動報告」100号の発行、おめでとうございます。

そして、毎回発行に携わってきた関係者の方々本当に疲れ様です。

ほとんど活動に貢献していない私が、この記念号に寄稿することは僭越ですが、震災後の福島で経験したことについて少しお話させていただきます。

### ～がれきの処理～

たぶんCNSの中では若手の範疇になる53歳の私ですが、現在、西新宿にある建設コンサルタントに勤務しており、昨年の3月まで約半年の間、福島に環境省の研究員として滞在し自治体の「がれき処理計画」や「除染計画」策定のお手

伝いをしていました。

一昨年の10月から、原発事故の影響でがれき処理が遅れている福島県浜通り地方のいくつかの市町村で、がれき処理計画の作成を行いましたが、最初は現地



のひっきりなしに行き交うダンプトラックと、うずたかく積み上げられたがれきの山、そして木コリと鼻を突く臭いに圧倒され、これを本当に処理できるのだろうかと、途方に暮れる思いでした。

## シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



福島県相馬市の仮置き場



仙台市の仮設焼却炉

すでに、津波被害の大きかった岩手、宮城では仮設焼却炉の計画が進んでいて、一部では焼却処理が開始されようとしていましたが、震災半年を経過した段階の福島では、すでに放射性物質による様々な噂や情報が飛び交い、がれきを置くための仮置場すらおぼつかない状況でした。

震災直後は、「絆」を合言葉に東北のがれきを関東やその他の自治体で積極的に受け入れようとする雰囲気がありました。放射性物質の影響が流布されるにつれ、受け入れ先となる処理施設の地域住民の方々の強烈な反対で次々と頓挫していきました。

がれきを処理するためには焼却施設や最終処分場の建設が必要でしたが、建設予定となつた地域の反応は直接被害を受けた福島でも一緒であり、それどころか将来に希望を見出せていない分反発が大きなものとなるのは仕方ないことでした。

とはいっても、自治体職員の献身的な働きで処理の進んでいた地域もあり、これは初動の素早さが功を奏していました。

久しく経験したことのない巨大な津波による未曾有の災害に加えて、全くの予想をしていなかつた原子力発電所の事故という状況下で、職員はもとより行政体そのものが思考停止状態にあり混乱を極める中において、ごみを処理することを思いつき行動した職員がいたことは、誠に驚嘆すべきことです。

そして、彼らにそれを促したのは、地域に根付いて活動してきた各種市民団体やNPOでした。

ニュースでは、がれきの撤去などのボランティアばかりがクローズアップされていますが、補助金による財源措置や法の再整備がないと具体的に行動できない行政体職員に代わって、机上で将来計画をつくり地域を説得しまとめてゆけるのは、やはりスペシャリストの集団であるNPOのような存在だろうと思います。

津波を受けた家は壊滅的な被害を受けていますが、道路一本挟んだ家は津波を免れほぼ無傷な状況です。

家も家族も失くした人、家も家族も無事だったが会社や仕事を失くした人、地震以後数日で日常が戻った人。

それらの心身に受けた傷の大きさがあまりにも違う人々が、同じ地域に集い社会生活を営むということは、外部の人間には解り得ないことです。

標準的なサービスを提供するのが行政だとすれば、コミュニティ内部の差異に応じた細やかな対応をするのがNPOなのかも知れません。

福島の海岸地域で仕事をする中で、集落、地域、自治体という団体の大きさに合わせた官民協働の組織作りが重要だと痛感しました。

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号

CSN



川内村の除染が完了した住宅の様子(裏の山まで徹底的に除去されています)

将来に対する大きな不安となっています。元々放射性物質の最終処分方法に確立されたもの

がなく、中間貯蔵施設がそのまま最終処分場になってしまいのではないかという危惧を抱くことを責められるものではありませんし、候補地周辺の人々が不安を持つこともやむを得ないと思ってします。

事故対応の遅さは、メディア等で指摘されるところです。

国や行政がただ手をこまねいているかというと、そうではありません。これに関わる人々は寝る間も惜しんで活動していますし、日々最良の方法を探しながら対応していますが、放射線や放射能に関する知識は高度で複雑であるため慎重な対応になると、事故の影響はあまりに巨大で悲惨なものであるため進捗が見えにくいからです。

高度な技術力に支えられたものほど、そこに秘められているリスクは極めて大きいということを改めて感じ、設計者としての責任の重さを再認識しました。同時に、高度な技術を一般の人々に解り易く伝えることも非常に重要であり、すでに学識経験者ですら信じられなくなっている人々に、解り易く伝える口を持つのは、やはり地域に根付いた技術者集団であり、地域の技術的良心としての存在価値を高めていくことなのだと思います。

私自身、現在も福島県内で除染の仕事に携わっていますが、事故以前の安心な生活環境を取り戻すために微力ながらも貢献できればと思っています。



道路の脇に積まれた除染廃棄物

## ～除染について～

がれき処理よりさらに深刻なのが原発事故による影響です。

そもそも、原子力発電所から放射性物質が出て生活空間に広がることなど全く想定していなかったので、規制法すら整備されていませんでした。

当面の緊急措置として、子供たちが最も長い時間過ごす学校や幼稚園、保育所の校庭の表土入替えなどが行われました。

その後、放射性物質汚染対処特措法<sup>1</sup>が制定され、汚染状況の重点的な調査測定が必要な「汚染状況重点調査地域」として、現在は東北から関東にかけての101の市町村が指定されています。

しかし、指定地域の人たちは、放射線に対するしっかりした知識がない上、法整備を行っていく過程で被ばく線量の基準や汚染区域の扱いなどが変わったため、国や行政に対しての不信や不安が増大する結果となっています。

現在、除染特別地域<sup>1</sup>では、追加被ばく線量を段階的かつ迅速に縮小することを目指し、広範囲な除染が進められています。先日、事故後いち早く役場を戻し「帰村宣言」をした川内村に行く機会があり面的除染の現実を見てきました。

地域全体に降り注いだ放射線物質を徹底的に取り除く作業は本当に大変なことで、家の屋根、壁の洗浄、庭の土や砂利の入れ替え、裏山の除草、枝打ち等々の作業を膨大な人員を投入して行わなければなりません。

そして除染に伴い大量の廃棄物が発生しているのですが、それらの根本的な処理方法については未だ明確な形となっておらず、そのことも

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号

CSN

## ■ CSN と、土木工学科＆環境都市学科 シニアアドバイザー 和久 昭正

### 1. はじめに

CSN (Civil Support Network) のホームページには、構成員は「都市・環境分野」のシニア技術者の専門家集団であると紹介されている。実態は土木工学科の出身者が多い。

活動内容は、土木の知識や経験を活かして、環境問題や防災問題、社会資本の維持管理問題などの都市問題等に取り組んでいる。まさに看板に偽りのない活動を続けている。

### 2. 土木工学科と都市環境学科

ところで、今の大学には、昔「土木工学科」と称していた学科は、ほとんどない。「都市環境学科」に変わっている。都市環境学科とは、どのような学問分野か。なぜ土木と言わないで「都市環境」なのか。

その理由は、土木工学科の受験を希望する学生が減ったためである。土木を希望しない最大の理由は、「土木」という言葉のイメージが「土方・土工」で、「汚い・きつい・危険」の3Kの条件を満足しているからである。

この対策として、各大学では頭をひねって「環境」や「都市」というようなスマートな名前を付けた。

しかし、それでも「都市環境学科」を希望する学生は余り増えていない。その理由は、入学して学ぶ科目に「環境に関する講義」はほとんどないからである。学生たちからは、少なくとも全体の半分の時間は「環境工学」が学べると期待して入学してきたのに、という不満の声が聞かれている。

### 3. 市民工学科

神戸大学では、土木工学科を「市民工学科」に変えた。とたんに受験生が激増した。元来、土木工学はシビルエンジニアリング (Civil Engineering) の和訳である。市民工学は「Civil Engineering」を直訳したわけである。学ぶ内



容は「土木工学」そのもので、構造力学・土質力学・水理学・建設マネジメント等々である。それでは何故増えたのか。

それは「市民工学」というネーミングからは、市民生活に直結する構造物（インフラ）を建設する工学というイメージが沸きやすいからである。学生たちも、自分の人生を何か世の中のために尽くせる仕事に就きたいと考えている。それが市民工学であるということを知って、入学を希望する者が増えたというわけである。

### 4. 国土形成を担う土木技術者

戸外に目をやると、見えるものは、建物、道路や鉄道、海や山や川、トンネル、橋などである。国土を形成している構造物のほとんどを土木と建築の技術が担っている。このように考えると、土木技術を通じて環境都市問題に取り組んでいるCSN活動を世間に広く認知していただくことは重要である。

それには、CSN活動を通じて、少しでも多くの社会貢献活動を行うことに尽きるを考えている。



# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号

CSN

## ■ 100号への航跡をたどる 事務局長（本紙編集担当） 高橋 暉

本号で100号に到達したこと。事務局編集担当者として、わが子が無事成人式を迎えたようなうれしさを覚えます。つたない紙面づくりにもかかわらず、ここまでおつきあいくださった会員のみなさまのご支援に、こころからお礼を申しあげます。

100号という区切りに、また次年度から月刊から季刊に移行するということで、ここで通巻100号の歩みをふり返り、「編集担当者がみた、足かけ10年間の月刊紙時代」を記録にとどめておきたいと思います。

「シビルサポートネットワーク活動報告」は、2004年10月に第1号を発信しました。

読者はCSN会員限定、発信部数28部（今月現在）のミニミニ月刊紙です。爾来、1月も欠けることなく発信つづけて、ここに100号を迎えたのです。

発行ではなく発信と表現したのは、**活動報告**がEメールによって送られているからです。

発行が順調につづいた理由は何でしょうか？

第一に、創刊した辻田代表の熱意によるものがあります。辻田代表は、毎月発行にこだわったのは、毎年会費をいただいてサポートしてくださっている会員のみなさまにきちんと活動をしていることを報告するという姿勢を示したかったからだ、と述べています。

第二として、会員への送付方法がEメールであり、実務的に簡略であったからだと思います。これが、郵送だったら、コピーして封筒につめて切手をはり投函する、というめんどうな作業を毎月おこない、かつ経費もバカにならず、とても長づきするものではありません。

10年前に、ほぼ全部の会員がすでにメールアドレスを持っていたのも好条件でした。会員の年齢を考えると、これはすごいことだったと思います。

電子データによる**活動報告**は、さらにすばらしいものをもたらしてくれました。

CSNホーム

ページのアーカイブに、100号すべてが収められていて、いつでもすぐに見ることができるようになっているからです。事務局には、プリントされた**活動報告**全部が、分厚いA4版キングファイルに綴じられていますが、場所をとるし、散逸しやすいのでこれを各家庭でおこなうのは大変だと思います。

本稿を書くにあたり、はじめてアーカイブを利用し、その威力と便利さを実感しました。物識りをたとえて、「頭に、知識が詰まった引き出しがたくさんある」といいます。アーカイブを操作していると、まさにそれが具体化されているような気になります。

力ネモモノもなく、ほそぼそとやってきたように思える我われの活動は、じつは、**活動報告**全100号にちりばめられて知的財産として構築され、立派な果実となって手にすることができているのです。電子データ化とそれによって整備されたアーカイブは、CSNの財産です。

さらに、このシステムをもっと充実させれば、今後の活動に寄与する無限の可能性があると確信します。

それでは、アーカイブを開いて、04年10月号（No.1）をあらためて見てみましょう。

NPO立上げにあたって、提携先を求めて、企業や団体を1か月に10か所も訪問したようです。見出しの代わりにその訪問先が日付順に並んでいて、面会者・会談内容の報告のみが淡々と記述されています。



## シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



設立準備に忙しいばかりかと思うと、最後の【まとめ】の部分に、環境政策提言に応募したと事実のみがさらりと書かれていて、早くも実質的な活動を開始している様子もうかがえます。発刊号の印象は、まさに業務日誌そのものです。

05年3月号（No.6）になって、記事の頭に、日付に代わって見出しがつきました。発刊以来6か月かかって、やっと業務日誌からニュースペーパーに脱皮したようです。

無から出発してものごとを作りあげる仕事は、大変なものであったと思います。辻田代表は当時の苦労を、「発行当時は活動の試行錯誤が続き、何も報告できるような主だった成果はなく、ただA4サイズ1ページの業務日誌的なつまらないものしか書けなかつたのが辛かったです。」とふり返っています。

ちなみに、紙面1ページ建て状態は、08年11月号（No.50）まで、足かけ5年もつづいています。

それでも、05年9月号（No.12）には、初の会員投稿記事が載って工夫のあとがしのれます。

11月号（No.14）には、早くもBCP（事業継続計画）の文字がでてきます。その後、事業の3本の柱となっているバイオマスは06年10月号（No.25）に、橋の長寿命化は07年10月号（No.37）に登場します。



06年11月号（No.26）には、日刊建設工業新聞に辻田代表のインタビュー記事が掲載されたと報じられています。翌12月号には、日刊建設工業に2度目の記事、東京新聞、専門雑誌等に報道されたとあり、ひとつの報道がきっかけになってつぎつぎとマスメディアの注目を浴びるようになる過程がうかがえます。

07年は、わたしにとって記念すべき年です。4月号（No.31）に高橋肇正会員に登録とあり、CSNの仲間に入れていただきました。8月号（No.34）あたりから、辻田代表の**活動報告**原稿を手直ししたり、会の規定集を作ったりしています。

08年には、**活動報告**編集を、それまでひとりで頑張ってきた辻田代表に代わって、引き受けることになりました。

わたしは、技術者集団であるCSNで、唯一人の事務系です。そもそも入会のきっかけは、「辻田代表をはじめ技術屋さんの文章は、専門用語・業界略語が駆使され、内容も詳細が尽くされている反面全体像が見えにくく、市民とともに社会貢献を標ぼうしている割にはわかりにくい、専門的な文章を素人にわかりやすい文章に直すようなことをお手伝いすることでしたから、一生懸命やらざるを得ないです。

この年の各号には、その後のCSNの活動を決定づける報告記事がたくさん見られます。

1月号（No.40）では、CSNが事務局をつとめたBCP研究会が終了、と報じられています。

毎月1回計12回開催されとあり、各回の研究内容の一覧表をみると、テーマ・講師ともにハイレベルであることに驚かされます。

BCPは、やがて中小企業の策定支援としてCSNの主要事業に育っていきます。それは、このようなしっかりとした基礎研究に裏付けられていることが、この記事からわかります。

さらに2月号（No.41）には、吉川市のNPOフォーラムでの中小企業向けBCPセミナーの報告が載っています。

このセミナーに参加された市内の工業団地協同組合の専務理事さんが、BCPの有用性に気づき、組合ぐるみの策定指導業務を2か年にわたって発注してくださいました。また、これが成功事例になって、その後の熊谷や岩槻の卸売団地からの業務受託につながったのです。セミナー会場の写真をみると、その恩人が、最前列で熱心に受講している様子が写っていました。

## シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



8月号（No.47）には、初めての大型イベントであるオープンセミナーが「リタイア後の地域デビュー」というタイムリーなテーマで開催され、おおいに盛りあがったと書かれています。

11月号（No.50）では、CSNのホームページがついに完成、としてその概要が紹介されています。

それまで、会員の中根さんのホームページに間借りしていたものを、独立し内容も一新したのです。

ホームページは、未知の団体や組織を調べるのに多くの人が活用していて、いまや信用調査の一手段にもなっているといわれています。まして、認知度の低いNPOにとって、そのホームページの充実度が組織運営を左右する、といってもいい過ぎではないでしょう。

この年に、それらのニーズにじゅうぶん応えられるような完成度の高いホームページを作りあげ、いまも適時更新されて新鮮さを保っていることは、じつに素晴らしいと思います。

12月号（No.51）は、創刊以来はじめて3ページ建てとなりました。手前味噌で恐縮ですが、このころから、会員の寄稿や写真もふえて記事に変化がつき、読んでもおもしろいものになってきたようです。

編集担当者になって以来、**活動報告**の掲載記事はNPO活動に関連する報告に限る、ページ建ても読みやすいように1ページのみ、と思い込んでいました。あるとき、このことを辻田代表に聞きました。

タブーどころか、「書きたくても書けなかっただけ」とのこと。ならば、とばかりにはりきって編集し始めたのが、この号からでした。

09年11月号（No.62）から、見出しを一新しました。読み物などが増えたこともあいまって「とても読みやすくなった」とのご感想をいただいています。

08年を契機に、**活動報告**がどのように変化をしていったか、各号のページ数を年間平均でみてみましょう。

前述のように、No.1から約5年間は1ページ建てでしたので、年間平均の各号のページ数は、1です。それが、09年1.8ページ、10年3.4ページ、11年5.2ページ、12年6.9ページと増加しています。また、手前味噌で恐縮ですが、かなり充実してきていると思います。

こう書くと、「ニュースペーパーの評価は量（ページ数）より質（内容）だろうが」との声がきこえます。

その通りですが、**活動報告**編集担当者として、あくまでも量（ページ数）にこだわりたいです。

というのも、「3号雑誌」ということばをご存知でしょうか。創刊して3号ぐらいで休刊や廃刊してしまう雑誌のことです。1・2号ははりきって、3号目はなんとか出しても、4号となると記事がなく（いわゆる種切れになって）、そのうちなんとかと思っているといつのまにか消えているのです。

記事原稿がなければ、雑誌は出来ません。ですから、記事確保は至上命令です。原稿はそもそも集まらないもの、それを乗り越える努力の結果が、ページ数になって現れます。したがって、質より量（ページ数）で評価してもらいたい、というわけです。



10年8月号（No.71）に、第3回の**オープンセミナー**に作家の椎名誠さんを講師に招いた記事が載っています。CSNのイベントの参加者は、どうしても会員の友人知人にかたよってしまいがちですが、この時は違っていました。記事の写真をみると、知らない人がたくさん写っています。椎名さんの「追っかけ」も数人いたとのことです。オープンセミナーですから、不特定多数の方に参加していただきたいのですが、こうでもしなければ集められないのかと思い知ったものでした。

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



11年は、東日本大震災があり、忘れられない年となりました。

3月号（№78）には、地震後1週間目に余震がつづくなか開始されたBCP策定支援講座の模様が、生々しく伝えられています。

5月号（№80）に、日本経済新聞の連載記事「のっぽ（NPO）さん」に取り上げられたと報告されています。日経に報道されれば一人前、社会的信用十分です。わがCSNも、ついにそこに到達したのでしょうか。事実、その後、業務の照会や、入会の問い合わせが増加しました。

さて、昨年度は、編集史上初の失敗を、ひとつならずふたつも、やってしましました。

まず、12年2月号（№89）の発行を忘れました。わたしの仕事スタイルは、ぎりぎりまで腰が上がらず、まぎわになって集中するという典型的一夜漬けです。**活動報告**の編集も、月末30日とか31日の声がかからないと手と頭が動きません。ところが、この月は29日のあと、両日ともやってきませんでした。**2月号どうしたの**と指摘されてはじめて気がつきました。それからは、得意の一夜漬けで数日の遅れを取り戻したのはいうまでもありません。

つぎに、10月号（№97）では、発行年月をミスしました。12年10月ではなく11年10月になっているのです。

行事報告記事を書くとき、定例行事は毎年同じ月に設定されているので、記事原稿が前年と似たものにならないように、前年同月号を参照して上書きすることにしています。その際、発行年の上書き修正を忘れたものと思われます。こんなミスは、ここに特筆するほどではないかもしれません、アーカイブなどで記事検索するときに支障がでそうです。



二大失敗につづいて、一大不思議について書きます。

本紙の名称が、いつのまにか変わっているのです。担当者たるわたしも、辻田代表も、知らないうちにです。**シビルサポートネットワーク活動報告**が**シビルサポートネットワークニュース**になっています。

本紙を、辻田代表は**活動報告**とよびます。わたしは**CSNニュース**という認識だったので、なぜそうよぶのか、ながい間不思議に思っていました。今回、アーカイブで創刊号をみて、当初は**シビルサポートネットワーク活動報告**となっていたことを知り、納得できたのでした。

それでは、いつ改称されたのでしょうか。少なくとも、わたしの入会以前のはずです。調べると、それは10年2月号（№65）からでした。意外と最近です。

その時期は、編集担当になって2年たっていて、わたしがタッチしないかぎり誌名変更はできないはずです。変えるとすれば大事なことなので、代表とかなり議論があったと思いますが、その覚えもありません。該当号の編集後記をみると、紙面改良に気を使っていることが書いてあるので、誌名変更があれば当然ふれているはずですが、みあたりません。さきほど、代表に問い合わせたら「いま、指摘されてはじめて気がついた」そうです。

不思議ですが、オバケのしわざではないでしょうから、おおかたの読者のご推測どおり「辻田も高橋もますます老人力がついて、当時のいきさつをすっかり忘れたとしか思えない」というところが真相なのかもしれません。

さて、この100号をふりかえって、本紙発刊当初の目的（①会員同士の意思疎通と親睦②情報交換の場 ③自分及び会としての記録）は果たせられたのでしょうか。会員みなさまのご評価を待ちたいと思います。

編集担当としては、「継続は力なり」といいますが、蓄積された知見とノウハウを、季刊誌となる**シビルサポートネットワークニュース**第2世代にぶつけたいと考えています。

マイホビー紹介④

鈴木進

## 一に海釣り、二にカラオケ、三にハイキング

私の趣味を並べると、①海釣り・②カラオケ・③ハイキング（軽登山）・④日曜大工（プライオリティーが高い順？）ということになるのでしょうか。

ハイキング以外はどのホビーも両親の影響を強く受けており、したがって歴史が古く筋金入りで、67歳になった今でも嬉々として楽しみ、遊んでおります。このうち主に①・②についてお話をさせていただきます。

### ① 海釣り

私の釣り好きは父親譲りです。父は石川県の輪島生まれで、東京築地生まれの母の家に戦前養子に入ったのですが、もともとは輪島塗の職人でした。美しい能登の海で幼い頃から釣りを楽しんでいたこともあり、私も幼い頃から良く東京湾に連れて行かれました。

職業柄、手先の器用な父は竿も仕掛けも自分で作り、木製のびく（上部に道具、下部に魚を収納する箱）、タモ網（魚をすくう網）などの小物もしっかりと自作していました。

父はすでに他界しておりますが、おかげでDNAをしっかりと受け継いだ（笑）息子の私は60年近く釣り人生を過ごしております。私はサラリーマンゆえの土日アングラーなのですが、一時は年間40回近く釣行した時期もありました。

最近は、沖での船釣りが主流ですが、静岡県御前崎から千葉県外房まで、四季を通じて深海から浅瀬まであらゆる魚種をターゲットにしています。それらの魚はそれぞれ竿・仕掛けが違いますが、現在使用中の竿・リールおよび、手作り仕掛け用パーツ（針・糸・ビーズ・etc…）の一部を以下の写真でご紹介いたします。



釣りの醍醐味は、自作の仕掛けが当たって釣った（釣れたではありませんぞ）ときの喜びと酒の好きな私にとって、まさに酒の肴をゲットすることにあります。海の恵みに感謝して包丁を奮い、釣り人のみに与えられた新鮮な幸を家族と共に味わうときこそまさに至福の時です（家族の本音は不明？）。

釣りはよく気の長い人でなければ向かないと言われる人がいますが、なんの！つりの最中は仕掛けを替え、えさを替えかなり忙しく私は気の短い人向きと考えております。

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



私の3人の子供のうち次男坊（現32歳）は幼い頃から釣行に連れ廻したこともあります。しっかりとDNAを受けてついであります。彼は小学校・中学校でお年玉使わずに貯めて、当時高価だった電動リールと竿を買ったという逸話があります。

以下に最近釣って孫に持たせた鰯と、夏に次男と釣行したキス釣りの写真を添付します。



## ② カラオケ

私の歌好きは母親譲りです。大正7年生まれの今は亡き母は、娘盛りをまさに戦争に明け暮れた時代に過ごしました。

私が幼い頃、歌の好きな母は、昭和初期の歌謡曲から戦争中の軍歌、戦後期の歌をいつも家の中で口ずさんでいました。私が生まれたのは昭和20年4月ですが、私を身ごもって防空壕に出たり入ったりした話しを良く聞かされました。私が物心着いた時から覚えていたのは、録音機がない時代に母がラジオにかけりついて歌謡曲の歌詞をメモしていた姿です。

私は小学校時代から、戦前の歌謡曲・軍歌のほとんどを歌い、敗戦後の歌も歌っておりました。小学校時代、父が始めた家具屋の職人さんに付いて、岡晴夫のショーを見に行った記憶は鮮明です。

時代の変遷に沿って、レコード（SP・LP・ドーナツ版・フォノシート）に始まりオープンリールテープ・8トラック・カセットテープ・CD・DVD・HDとメディアは代わりました。私の歌のレパートリーは1,000曲を超えております。

悲しいかな、年とともに題名・歌手・メロディーを失念するため、数年前に以下のように自分の歌える歌を昭和初期から時代別（約1,200曲）、歌手デビュー年別（約600名）に整理した「歌の一覧」を作成いたしました。

古い歌手が順次亡くなっていますが、世代が交代して忘れ去るには余りにも惜しい素晴らしい歌を残したい一心で、その一部を以下に作成しました。女房・子供は見向きもしませんし価値も全く認めておりません（時にファミリーで行くカラオケで家族の誰も知らない歌を歌う時は男の孤独を感じます・・・）。

「老いたる者には過ぎにし青春の郷愁・・・」とばかり同世代の仲間と共に廃業寸前の年老いたママが経営するスナックで歌う日々です（嗚呼）。（同好の士よ集まれ！！）

なお、「歌の一覧」は興味のある方にはお送りいたします（いないでしょうね（笑））

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号

昨年の8月に、黒部アルペンルートから立山三山(雄山・大汝山・富士の折立)の3,000M級の山々を、3日間で縦走しました。

日ごろは近郊の1,000M程度の峰に行っており、初めて本格的な登山を経験しました。

8月の真夏に雪渓があり、雄大なパノラマは実に見事でした。かなりきつかったのですが、なんとか完歩でき、体力の確認も出来ました。

これからも、趣味を通じて健康管理に勤しみたいと思っております。



## 50音順 歌手名とデビュ一年 (あ~た)

50音	歌手名	年	50音	歌手名	年	50音	歌手名	年	50音	歌手名	年
あ	淡谷のり子	12	お	岡 曜夫	14	き	木ノ実ナナ	57	さ	桜田淳子	48
	安西愛子	19		小笠原美都子	16		木村友衛	59		さくらと一郎	49
	暁 テル子	26		小畠 実	23		北山たけし	H21		西城秀樹	49
	青木光一	28		近江俊郎	22	く	楠木繁夫	10		斎藤こず恵	51
	青木はるみ	29		岡本敦郎	25		久保幸江	26		サザンオールスターズ	51
	アイジョージ	35		織井茂子	28		久保 浩	39		佐藤宗幸	53
	赤木圭一郎	35		大津美子	30		黒沢明と			サーカス	54
	梓 みちよ	38		大下八郎	39		ロスプリモス	41		さだまさし	54
	青山和子	39		扇 ひろこ	42		黒木 憲	43		ザ・ビーナス	56
	青江三奈	41		大木英夫	43		グレープ	49		坂本冬美	62
	荒木一郎	41		小川知子	43		黒沢年男	49		the boom	H3
	愛田健二	45		岡林信彦	43		久保田早紀	54			
	朝丘雪路	45		奥村チヨ	44		クリスタルキング	55	し	東海林太郎	9

## 歌の変遷 (その3) (昭和39年～昭和47年)

曲名	歌手	曲名	歌手	曲名	歌手	曲名	歌手
<b>39年-2(1964年)</b>							
夜明けの歌 (夜明けの歌よ)	岸洋子	こまつちやうな (困つちやうな)	山本リンド	恋の季節 (忘れられない)	ピンキーとキラーズ	愛の奇跡 (寂しげな雨にぬれ)	ヒロザンナ
酔いしれて (恋に苦しみ)	(44年)〃	どうにもとまらない (贈を信じちゃ)	(47年)〃	神様お願ひ	テンブターズ	愛は傷つきやすく (自由に)	〃
希望 (希望という名の)	(45年)〃	狙い撃ち (ウダダウダダ)	〃	今日生きよう	〃	長い髪の少女	ザゴールデンカップス
恋心 (恋は不思議ね)	〃	遠い者	シャーブホーフス	マトモアゼルブルース	ザジャガース	あなたのブルース (雨が窓)	矢吹健
君だけを (いつでもいつでも)	西郷輝彦	あの娘たずねて (花の都の)	佐々木新一	この草に愛を	ザサベージ	うしろ姿 (帰っちゃいやよ)	(47年)〃
十七才のこの胸に (空を真っ赤に)	〃	君が好きだよ (夜空の星に)	〃	星空の孤独	和田アキ子	うしろ姿 (帰っちゃいやよ)	ザシングトーンズ
星娘 (星のようなあの娘)	(40年)〃	ハラが咲いた (ハラが咲いた)	マイク・喜木	ドシヤブリの雨の中で	(44年)〃	グッドナイトベビー	ザシャデラックス
星のフランコ (好きなんだけど)	(41年)〃	思い出の者 (君を見つけた)	デワイルドワンズ	笑って許して	(45年)〃	君について行こう	ジーオズミド
何も言わないで (今は何も)	園まり	若者たち (君の行く道は)	ザプロード	天使になれない	(46年)〃	小さな恋人	高橋勝と
逢いたくて逢いたくて (愛した人)	(41年)〃	丸りたくないの (あなたの過去)	菅原洋一	天使になれない	(47年)〃	思案橋ブルース (泣いて)	コロラティーノ
夢は夜聞く (雨が降るから)	〃	芽生えてそして (あなたの瞳が)	菅原洋一	あの鐘を鳴らすのはあなた	〃	経験 (やめて愛していないなら)	辺見マリ
<b>40年(1965年)</b>							
東京流れもの (流れ流れて)	竹越ひろ子	今日でお別れ (今日でお別れ)	(44年)〃	街角	(51年)〃	経験 (やめて愛していないなら)	辺見マリ
唐獅子牡丹 (義理と人情)	高倉健	愛のフィナーレ (愛の終わりは)	(45年)〃	待ちわびて	(57年)〃	誰もいない海 (今はもう秋)	トウェモア
網走番外地	〃	誰もいい (誰もいない)	〃	天使の誘惑 (好きなのに)	黛じゅん	或る日突然	(47年)〃
下町育ち (三味と踊りは)	笹みどり	おもいで (貴方と歩いた)	布施明	恋のハレルヤ (ハレルヤー)	〃	知床旅情 (知床の岬に)	加藤登紀子
女心の歌 (あなただけはと)	バーブ・佐竹	霧の摩周湖 (霧に抱かれて)	〃	ゆうべの秘密 (ゆうべのことは)	小川知子	一人寝の子守唄 (一人で寝)	(44年)〃
女ひとり (京都大原三千院)	デュークエイセス	恋 (恋というものは)	(42年)〃	初恋の人 (そよ風みたいに)	(44年)〃	愛のくらし	(46年)〃
夏の日の思い出 (綺麗な月が)	日野てる子	愛は不死鳥	(45年)〃	小さなスナック (僕が初めて)	ハーフルント	琵琶湖周航の歌	〃
	積み木の部屋	いつの間にか	(49年)〃	小さな日記 (小さな日記に)	フォーセインツ	黒の舟歌	(49年)〃
				友よ (友よ夜明け前の)	岡林信彦	この空を飛べたら	(53年)〃

# シビルサポートネットワークニュース 2013年1月号



## NPO フォーラム 第6回よしかわ市民広場 高齢者ケアシステム パネル展示へ

恒例の、NPO フォーラムよしかわ市民広場が、  
2月9日(日)午後2時より、市民交流センター  
おあしすで開催されます。

CSNは、毎回参加して施策提言をおこなっています。ことしは高齢者ケアシステムについてパネル展示をします。これは、松戸市で高齢者の地域医療に取組んでいる島村トータルケアクリニック島村善行院長への提案を、パネルにまとめたものです。

会員のご来場をお待ちしています。

NPOフォーラム『第6回よしかわ市民広場』

### 今、私たちの「根力」が試される時

『協働社会』が目指す新しい「自治」のかたち～自治基本条例を学習して～

日時 平成25年2月9日(土)午後2時より  
場所 市民交流センターおあしす  
主催 よしかわNPO連絡会・吉川市

基調講演 「身近な課題解決のために  
私たち市民が出来る事」  
講師 山梨学院大学教授 白崎昭夫 氏  
場所 おあしすセミナールーム

中高年の声、児童と夢を交えてチャットセッション  
吉川先生のブリーフ等は裏面をご覧ください。

パネル展示 市内NPO団体の紹介パネルを展示  
場所 おあしすセミナールーム

～『自治基本条例』を学習して～ ～よしかわNPO連絡会～  
私たち「よしかわNPO連絡会」は、これまで全く1回にわたり、吉川先生の著書「地域のメガバインスと基礎自治体の役員」(佐藤書房)『自治基本条例』について学習をしてきました。  
自治基本条例は「まちづくり」に必要な考え方や仕組みなどの基本的なルールを定めたもので、『自治体の運営』とともに言われています。  
これからは、吉川・議会・行政が協働でまちづくりを行っていくために必要な不可欠なものであり、追加でも農業・越谷・三郷・八潮など多くの自治体が策定しています。  
自治の運営は「市民」です。吉川市がこの策定に取り組む神、行政のお仕事も大切でならないよう、市民である私たちが学び、この角の意義と一緒に学習しませんか。

### CSN 1月の動き

(7日)

事務局定例会 (辻田、宇佐、高橋)

(18日)

BCP事業説明で企業訪問(辻田、高橋)

(24日)

土木学会 NPO連絡協議会(辻田)

(30日)

活動報告1月号発行

(31日)

シビルNPO連絡会議(高橋)

### 【編集後記】

・本号で100号となりました。

会員のみなさまのご協力をいただいてこの日を迎えることができました。ここより感謝申し上げます。これからも変わらぬご支援をお願い申しあげます。

・100号記念特集として、「100号に寄せて」を会員からご寄稿いただきました。どれも、単なるお祝いのことばを超えた、重く貴重な論述です。

・「マイホビー紹介」で鈴木さんは、古くて忘れそうな曲と歌手をピックアップされています。若い衆は見向きもしないそうですが、小生は一覧表ほとんど全部知っていました。

でも、暮れの紅白歌合戦にかかった歌の八割は初耳でした。

なんだか、うれしいような悲しいような気分です。

(事務局:高橋)